博士論文（要約）

論文題目　　堀辰雄論――日本古典文学と西洋文学――

氏　　名　　大石　紗都子

（２）目次

序論　はじめに …… 1

第一部　堀文学における西洋的知性―〈芸術家小説〉の追求―

第一章　『風立ちぬ』を生んだ文体と方法論 …… 5
第二章　『美しい村』におけるゲーテとプルースト―〈芸術家小説〉の観点から …… 23
第三章　『美しい村』から『風立ちぬ』へ　―合わせ鏡としての両作品 …… 47

第二部　堀辰雄の文学―日本古典文学と西洋文学の結節点

第一章　『曠野』における達成―“古典回帰”との関連と「不条理」の追求― …… 57
第二章　『姨捨』にみる東西文学の融合―「永遠の女性」について …… 76
第三章　『姨捨』『姨捨記』と更級日記―保田與重郎との関連― …… 101

第三部　「昭和十年代」と“古典回帰”試論　―国文学研究と「日本浪曼派」

第一章　堀辰雄と古典文学―実存と“他者”による救いの観照 …… 119
第二章　堀辰雄『魂を鎮める歌』――「万葉集」と「伊勢物語」の連関 …… 134

第三章　反語的精神の萌芽
―「日本浪曼派」始発期の可能性と亀井勝一郎『生けるユダ（シエストフ論）』
…… 145

結び　おわりに　堀辰雄の文学　その出発点と到達点をつらぬくもの …… 162

【別表】『風立ちぬ』『美しい村』における類似表現等の対照表 …… 165

初出一覧・奥付 …… 173

（３）本文

「本文」は、書籍としてすでに出版されているため、全文公表できない。
書誌事項は以下の通り。

大石紗都子
『堀辰雄がつなぐ文学の東西　――不条理と反語的精神を追求する知性――』
（晃洋書房、平成 31 年 3 月）　ISBN　9784771031746

（４）参考文献一覧

▼適宜旧字は新字に改め、ルビ等は原則として省略した。固有名詞等に関しては、適宜旧字による表記を用いたものがある。

【堀辰雄全集・作品集】

堀辰雄『ルウベンスの偽画』（江川書房、昭和八・二）
堀辰雄『美しい村』（野田書房、昭和九・四）
堀辰雄『風立ちぬ』（新潮社、昭和一二・六）
堀辰雄『風立ちぬ』（野田書房五百部限定版、昭和一三・四）
堀辰雄『聖家族』（新選純文学叢書、新潮社、昭和一四・八）
堀辰雄『雉子日記』（河出書房、昭和一五・七）
堀辰雄『晩夏』（甲鳥書林、昭和一六・九）
堀辰雄『曠野』（養徳社、昭和一九・九）
堀辰雄『花あしび』（青磁社、昭和二一・三）
堀辰雄『美しい村』（青磁社、昭和二二・三）

『堀辰雄作品集』（全六冊『聖家族』『美しい村』『風立ちぬ』『晩夏』『菜穂子』『花を持てる女』）
（角川書店、昭和二一・一一～二四・八）
『堀辰雄全集』（全八巻および別巻二冊、筑摩書房、昭和五二・五～五五・一〇）

【堀辰雄に関する参考文献／単行本】

吉村貞治「『堀辰雄　魂の遍歴として』（東京ライフ社、昭和三〇・七）
遠藤周作『堀辰雄』（一古堂書店、昭和三〇・一一）
佐々木基一・谷田昌平『堀辰雄　その生涯と文学』（青木書店、昭和三〇・一二）
中村真一郎『近代文学鑑賞講座１４』（角川書店、昭和三三・一〇）
吉田精一『現代文学と古典』（至文堂、昭和三六・一〇）
高田瑞穂『堀辰雄』（明治書院、昭和四一・一〇）
『堀辰雄〈日本文学研究資料叢書〉』（有精堂、昭和四六・八）
大森郁之助『堀辰雄の世界』（桜楓社、昭和四七・一一）

『現代日本文学アルバム　堀辰雄』（学習研究社、昭和四九・八）
堀多恵子『片蔭の道』（青娥書房、昭和五一・九）
小久保実『新版堀辰雄論』（麦書房、昭和五一・一〇）
小川和佑『評伝堀辰雄』（六興出版、昭和五三・六）
池内輝雄編『鑑賞日本現代文学　第１８巻』（角川書店、昭和五六・一一）
谷田昌平・佐々木基一『堀辰雄』（花曜社、昭和五八・七〈改訂版〉）
中島昭『堀辰雄覚書―『風立ちぬ』まで―』（近代文藝社、昭和五九・一）
竹内清己『堀辰雄の文学』（桜楓社、昭和五九・三）
『新潮日本文学アルバム１７　堀辰雄』（新潮社、昭和五九・一二）
小久保実編『論集　堀辰雄』（風信社、昭和六〇・二）
竹内清己『堀辰雄と昭和文学』（三弥井書店、平成四・六）
中島昭『堀辰雄――昭和十年代の文学』（リーベル出版、平成四・一二 ）
西原千博『堀辰雄試解』（蒼丘書林、平成一二・一〇）
『堀辰雄事典』（勉誠出版、平成一三・一一）
竹内清己『堀辰雄――人と文学』（勉誠出版、平成一六・一二）
渡部麻実『流動するテクスト　堀辰雄』（翰林書房、平成二〇･一一）
宮坂康一『出発期の堀辰雄と海外文学　「ロマン」を書く作家の誕生』
（翰林書房、平成二六・三）

【堀辰雄に関する参考文献／雑誌・単行本所収論文】

立原道造「風立ちぬ」（「四季」昭和一三・六／一三・七／一三・一二）
佐伯彰一「堀辰雄論」（「赤門文学」昭和一七・一〇）
遠藤周作「堀辰雄論覚書」（「高原」昭和二三・三／二三・七／二三・一〇）
長谷川泉「風立ちぬ（堀辰雄）」（「解釈と鑑賞」昭和二八・八）
河上徹太郎「堀辰雄――思ひ出にまつはる文学論――」（「文藝」昭和二八・八）
福永武彦「第二巻解説」（新潮社版『堀辰雄全集』月報、昭和三三・七）
谷田昌平「堀辰雄と古典」（「国文学」昭和三六・三）
塚本康彦「平安朝文学――堀辰雄の日本的なもの」（「解釈と鑑賞」昭和三六・三）
富士川英郎「リルケ―堀辰雄の西欧的なもの―」（「解釈と鑑賞」昭和三六・三）
秋山虔「近代文学と古代文学」（「国文学」昭和三七・六）
木村正中「堀辰雄と王朝文学」（「国文学」昭和三八・七）
小谷恒「堀辰雄と折口信夫」（「国文学」昭和三八・七）
横田俊一「堀辰雄と西欧文学―リルケ体験を中心に―」（「国文学」昭和三八・七）
丸岡明「橙色の雁皮の花―浅間山麓の堀辰雄について―」（「国文学」昭和三八・七）
杉野要吉「昭和十年代の堀辰雄―「日本的なるもの」への接近姿勢をめぐって―」（「北海道高等学校教育研究会紀要」昭和四〇・三／補筆『堀辰雄〈日本文学研究資料叢書〉』有精堂、昭和四六・八）
田口義弘「堀辰雄とリルケ」（『堀辰雄全集』第十巻、角川書店、昭和四〇・一二）
杉浦博「堀辰雄におけるリルケ」（「一橋論叢」昭和四二・二）
石原昭平「「蜻蛉日記」の意義と堀辰雄」（「解釈と鑑賞」昭和四二・二）

小久保実「王朝小説の方法について」(「解釈と鑑賞」昭和四二・二)
小田切秀雄「堀辰雄『風立ちぬ』」(「教育国語」昭和四三・三)
杉野要吉「堀辰雄における日本古典接近の問題―小久保・高田両氏の御論にふれて―」(「国語と国文学」昭和四三・七)
金沢由利子「堀辰雄と古典―『姨捨』を中心に」(「立教大学日本文学」昭和四四・六)
座談会　中野重治・伊藤整・堀多恵子・神保光太郎「堀辰雄　人と作品」(「四季」昭和四四・七)
大野節子「堀辰雄『物語の女』の一考察――『更級日記』との関連について――」(「文芸研究」昭和四四・八)
池内輝雄「堀辰雄『ルウベンスの偽画』と『聖家族』」(「東京教育大学文学部紀要　国文学漢文学論叢」昭和四六・三)
上野英雄「R. M. リルケと堀辰雄　死の問題を中心に」(「富山大学教養部紀要」昭和四六・三)
内山知也「堀辰雄の《支那趣味》」(「日本近代文学」昭和四六・五)
池内輝雄「堀辰雄「ルウベンスの偽画」小論―「詩」と「真実」をめぐって」(「大妻国文」昭和四七・三)
大森郁之助「『姨捨』での救抜」(『堀辰雄の世界』桜楓社、昭和四七・一一)
西本貞「二つの更級日記―堀辰雄ノートⅡ―」(「日本文学研究　高知日本文学研究会」昭和四八・一二)
長谷川孝士「曠野」(「解釈と鑑賞」昭和四九・二)
佐藤泰正「堀辰雄における東方と西方」(『近代』〈日本の説話〉第６巻、東京美術、昭和四九・三)
神品芳夫「堀辰雄とリルケ」(「国文学」昭和五二・七)
大森郁之助「堀辰雄に於ける所謂日本回帰の虚実―并・折口信夫受容の実態―」(「札幌大学教養部紀要」昭和五三・九)
渡辺広士「『風立ちぬ』の意味」(「ユリイカ」昭和五三・九)
高橋英夫「二人称の余韻―堀辰雄と人間」(「ユリイカ」昭和五三・九)
佐藤泰正「『風立ちぬ』の世界―堀辰雄とキリスト教―」(佐藤泰正編『文学における宗教』笠間書院、昭和五四・四)
菅谷規矩雄「婚約―《風立ちぬ》の空間」(『迷路のモノローグ』白馬社、昭和五六・三)
竹内清己「『風立ちぬ』―支配の構造―」(『堀辰雄の文学』桜楓社、昭和五九・三)
石内徹「堀辰雄の折口信夫受容」(小久保実編『論集　堀辰雄』風信社、昭和六〇・二)
藤澤成光「風立ちぬ〔堀辰雄〕」(三好行雄編『日本の近代小説Ⅱ』東京大学出版会、昭和六一･七)
前田愛「堀辰雄『美しい村　軽井沢』」(『幻影の街―文学の都市を歩く』小学館、昭和六一・一一／『前田愛著作集』第五巻　筑摩書房、平成一・七)
岡本文子「堀辰雄・杜甫訳詩考」(「和洋女子大学紀要」昭和六二・三)
野沢京子「幻像の生成―堀辰雄『美しい村』を読む―」(「立教大学日本文学」昭和六三・七)
小泉浩一郎「「風立ちぬ」の〈愛〉」(「近代文学研究」昭和六三・八)

山本裕一「『曠野』論覚書」（「別府大学紀要」平成四・一）
渡辺善雄「堀辰雄「曠野」」（「月刊国語教育」平成四・六／平成四・七）
渡辺実「「ひとごと」風「私」小説の表現―堀辰雄『風立ちぬ』の文章―」
（「国文学紀要」平成五・一）
安藤宏「現実への回帰―堀辰雄『風立ちぬ』を中心に」
（『自意識の昭和文学―現象としての「私」』至文堂、平成六・三）
饗庭孝男「西欧的〈知〉の基層――堀辰雄の『幼年時代』と『曠野』」
（「文学界」平成六・四）
影山恒男「『姨捨』論」（「解釈と鑑賞」平成八・九）
宮内豊「『風立ちぬ』のしたこと」（「群像」平成九・二）
石井和夫「『風立ちぬ』の修辞と文体」
（佐藤泰正編『文学における表層と深層』笠間書院、平成一〇・一〇）
工藤茂「堀辰雄「姨捨」考」（「別府大学紀要」平成一〇・一二）
石田和之「堀辰雄『風立ちぬ』論―予定調和の世界（あるいは責任回避）」（東洋大学大学院紀要（文学研究科）平成一二・二）
岩本晃代「堀辰雄『風立ちぬ』の方法―〈四季派〉とリルケ―」
（「国語国文学研究」、平成一四・二）
井上善博「堀辰雄の〈日本回帰〉と保田與重郎―評論「更級日記」の影響をめぐって―」
（平成一六・三「湘南国文」）
岡崎直也「堀辰雄「曠野」の方法―古典回帰の内実―」（「國學院雑誌」平成一六・一一）
鈴木貞美「生の愉悦を書くこと」（「水声通信」平成一八・七）
飯島洋「「かげろふの日記」論―リルケ受容からの逸脱―」（「国語国文」平成二〇・三）
宮坂康一「「ルウベンスの偽画」とコクトオ「職業の秘密」―藝術観の受容をめぐる一考察」（「比較文学年誌」平成二一・三）
宮坂康一「堀辰雄におけるジイド「ドストエフスキイ論」の受容――論理性と不合理の戦場――」（「昭和文学研究」平成二二・九）
中村三春「花のフラクタル『美しい村』の生成」（『花のフラクタル　２０世紀日本前衛小説研究』翰林書房、平成二四・一）
竹内清己「迢空と辰雄にみる鎮魂―近代日本文学における生と死―」（『臨床の知としての文学』鼎書房、平成二四・三）
渡部麻実「堀辰雄「風立ちぬ、いざ生きめやも」―『風立ちぬ』から『万葉集』へ、『万葉集』から『風立ちぬ』へ―」（「国文目白」平成二五・二）
池内輝雄「増殖する物語群――『美しい村』を中心に」（「文学」平成二五・九―一〇月号）
小川靖彦「もう一つの防人像―堀辰雄のノオト「（出帆）」をめぐって〈戦争と萬葉集〉―」（「文学」平成二七・五―六月号）
宮坂康一「『美しい村』における「変化」―作品及びプルウスト受容の「変化」―」（「国文学研究」平成二七・一〇）

【その他】
福島吉彦『中国詩文選８　漢書』（筑摩書房、昭和五一・七）
山口佳紀・神野志隆光　校注・訳『古事記』〈新編日本古典文学全集〉
（小学館、平成九・六）
佐竹昭広ほか校注『萬葉集』全四巻〈新日本古典文学大系〉
（岩波書店、平成一一・五～一五・一〇）
片桐洋一編『鑑賞日本古典文学　伊勢物語・大和物語』（角川書店、昭和五〇・一一）
渡辺実　校注『伊勢物語』〈新潮日本古典集成〉（新潮社、昭和五一・七）
『中西進万葉論集』第六巻（講談社、平成七・九）
堀内秀晃・秋山虔　校注『竹取物語・伊勢物語』〈新日本古典文学大系〉
（岩波書店、平成九・一）
阿部秋生ほか　校注・訳『源氏物語』全六巻〈新編日本古典文学全集〉
（小学館、平成六・八～一〇・四）
原岡文子　訳注『更級日記』（角川ソフィア文庫、平成一五・一二）
片桐洋一　編『伊勢物語古注釈書コレクション』第一巻～五巻
（和泉書院、平成一一・三～一八・一〇）
片桐洋一・山本登朗　責任編集『伊勢物語古註釈大成』第一巻、二巻
（笠間書院、平成一六～一七）

矢内原伊作訳「窓」（弥生書房版『リルケ全集』第２巻、昭和四八・六）
大山定一訳「マルテの手記」（弥生書房版『リルケ全集』第４巻、昭和四八・九）
白井健三郎・吉田加南子訳「窓」（河出書房新社版『リルケ全集』第５巻、平成六・四〈再版〉）
手塚富雄訳『ドゥイノの悲歌』（岩波文庫、昭和三二・一二）
浅井真男『ドゥイーノ悲歌』（筑摩書房、昭和五三・二）

『アンドレ・ジイド全集　第一巻』（建設社、昭和九・三）
『ジイド全集　第一巻』（建設社、昭和一一・七）
鈴木道彦訳『失われた時を求めてＩ　第一編　スワン家の方へＩ』（集英社、平成八・九）
『シェストフ選集』１巻・２巻（改造社、昭和九・一二～一〇・三）

三上参次・高津鍬三郎合著、落合直文補助『日本文学史』上巻（金港堂、明治二三・一〇）
芳賀矢一纂訂『攷證　今昔物語集　本朝部上』（冨山房、大正三）
池辺義象編『校註国文叢書　今昔物語上巻』巻一六（博文館、大正四・七）
芥川龍之介『六の宮の姫君』（「表現」大正一一・八）
池田亀鑑『宮廷女流日記文学』（至文堂、昭和二・二）
『新約聖書』（米国聖書教会、昭和二〈第五版〉）
折口信夫『古代研究　国文学篇』（大岡山書店、昭和四・五）
島津久基『源氏物語を鑑賞しようとする人の為に』（「国語と国文学」昭和四・七）
中島健蔵訳 フレデリィク・ルフェヴル 「「海辺の墓地」（ポォル・ヴァレィリ）解案」（「詩

と詩論」昭和四・九）
笹澤美明訳　アルベルト・ゼールゲル「ライネル・マリア・リルケ」（「詩と詩論」昭和四・九）
佐山済「更級日記内容の一解釈」（「国語と国文学」昭和六・九）
折口信夫「近江歌に現れた小説的な素材」〈講談筆記〉（「短歌月刊」昭和七・一一）
三木清「不安の思想と其の超克」（「改造」昭和八・六）
西下経一「紫式部日記と更級日記」（「国語と国文学」昭和八・一〇）
阿部六郎・河上徹太郎訳『悲劇の哲学』（芝書店、昭和九・一）
保田與重郎「アツチカのオリーヴの樹」（「コギト」昭和九・一）
河上徹太郎訳『虚無よりの創造　附シエイクスピアに於ける倫理の問題』（芝書店、昭和九・七）
保田與重郎「技術と芸術」（「文藝汎論」昭和九・九）
亀井勝一郎「政治と文学について」（「文藝」昭和九･九）
三木清「シエストフ的不安について」（「改造」昭和九・九）
三木清「浪漫主義の擡頭」（「都新聞」昭和九年一一月八日～一一月一一日）
阿部六郎「シエストフの思想」（「文藝」昭和九・一二）
板垣直子「「浪漫派」と「能動主義精神」批評」（「セルパン」昭和一〇・二）
国語教育学会編『日本文学の本質と国語教育』（岩波書店、昭和一〇・三）
江口渙「浪曼主義の問題」（「東京朝日新聞」昭和一〇年四月五日・六日）
佐佐木信綱「第五編　日記文学の研究」（『国文学の文献学的研究』岩波書店、昭和一〇・七）
川端康成『純粋の声』（「婦人公論」昭和一〇･七）
保田與重郎「更級日記」（「国語国文」昭和一〇・八）
萩原朔太郎「情熱の歌人　式子内親王」（「コギト」昭和一〇・九）
岡野隆子「良妻賢母主義の永遠性」（『卒業生壱千名記念特輯号』東洋女子歯科医学専門学校校友会、昭和一一）
保田與重郎「更級日記」「コギト」（昭和一一・一）
中島健蔵「『窄き門』をめぐりて」（『ジイド人生讀本』六藝社、昭和一一・三）
宮田和一郎「日記文学と更級日記」（「解釈と鑑賞」昭和一一・一〇）
山岸徳平「蜻蛉日記と更科日記に就いて」（「解釈と鑑賞」昭和一一・一〇）
匿名批評「大波小波」（「都新聞」昭和一二年九月二三日）
喜多義勇『蜻蛉日記講義』（東京武蔵野書院、昭和一二・一二）
亀井勝一郎『人間教育―ゲエテへの一つの試み』（野田書房、昭和一二・一二）
保田與重郎『戴冠詩人の御一人者』（東京堂、昭和一三・九）
保田與重郎　改版『日本の橋』（東京堂、昭和一四・四）
芳賀檀「リルケの生のエチカ」（「文藝」昭和一四・九）
清水文雄「作家の生成　更級日記　四」（「文藝文化」昭和一五・三）
遠藤嘉基「風流の展開」（「形成」昭和一五・六）
清水文雄『女流日記』（子文書房、昭和一五・七）
山岸外史「永瀬清子の詩」（「文藝世紀」昭和一五・一二）

高神覚昇『父母恩重経講話』（講談社、昭和一六）
鹽田良平「宇治の薫と憂愁の精神」（「古典研究」昭和一六・四）
中島健蔵『現代作家論』（河出書房、昭和一六・九）
村上菊一郎編『仏蘭西詩集』（青磁社、昭和一六・一一）、同普及版（昭和一八・一）
島津久基「源氏物語」（「文藝」昭和一六・一二）
特輯「みやびの伝統」（「文学」昭和一八・一一）
吉澤義則「みやびに就いて」（「文藝世紀」昭和一九・八）
荒正人「第二の青春」（「近代文学」昭和二一・二）
亀井勝一郎『我が精神の遍歴』（創元文庫、昭和二六・九）
『折口信夫全集　第十二巻』（中央公論社、昭和三〇・八）
亀井勝一郎「回想―一九三三年を中心に―」（「文学」昭和三三・四）
思想の科学研究会編『共同研究　転向　上巻』（平凡社、昭和三四・一）
橋川文三『日本浪曼派批判序説』（未来社、昭和三五・二）
橋川文三『増補日本浪曼派批判序説』（未来社、昭和四〇・四）
利根川裕『亀井勝一郎　その人生と思索』（大和書房、昭和四二・一一）
和泉あき『日本浪曼派批判』（新生社、昭和四三・六）
ゲルハルト・ツアハリアス　渡辺鴻訳『バレエ』（美術出版社、昭和四三・九〈再版〉）
犬養廉「更級日記の虚構性」（「国文学」昭和四四・五）
保田與重郎『日本浪曼派の時代』（至文堂、昭和四四・一二）
『亀井勝一郎全集』第一巻　（講談社、昭和四六）
『亀井勝一郎全集』第二巻　（講談社、昭和四七）
石堂清倫、竪山利忠編『東京帝大新人会の記録』経済往来社、昭和五一･六）
武田友寿「亀井勝一郎の「転向」」（「清泉女子大学紀要」昭和五六・一二）
木村正中「『更級日記』における『源氏物語』の享受」（寺本直彦編「『源氏物語』とその受容」右文書院、昭和五九・九）
野口武彦『文化記号としての文体』（ぺりかん社、昭和六二・九）
『講座昭和文学史　第二巻　混迷と模索〈昭和十年前後〉』（有精堂、昭和六三・八）
『岩波講座日本文学史　第１３巻　２０世紀の文学２』（岩波書店、平成八・六）
伊豆利彦「『日本浪曼派』とナルプ（日本プロレタリア作家同盟）」（「解釈と鑑賞」平成一四・五）
山本直人「昭和の疾風怒濤時代」（「昧爽」平成一六・二）
西村将洋「神話の造形――保田與重郎と知／血の考古学――」（伊藤徹編『作ることの日本近代――一九一〇―四〇年代の精神史』世界思想社、平成二二・一〇）

【堀辰雄手沢本・および蔵書】

●『伊勢物語』関連

太田貞一『新釈伊勢物語』（籾山書店、大正二・一〇／堀辰雄文学記念館蔵）
大津有一『岩波講座　日本文学　伊勢物語―定家本の展望―』（岩波書店、昭和六・八／

堀辰雄文学記念館蔵）
久松　潜一『校註伊勢物語（改造文庫）』（改造社、昭和七・四／堀辰雄文学記念館蔵）
鎌田正憲『考証伊勢物語詳解』（南北出版部、大正八・六 ／堀辰雄文学記念館蔵）
吉澤義則『全訳王朝文学叢書　第一巻』
（王朝文学叢書刊行会　大正一三・六／堀辰雄文学記念館蔵）
国文名著刊行会『伊勢物語古註大成』（昭和九・一一／堀辰雄文学記念館蔵）
藤井高尚『伊勢物語新釈』（国文名著刊行会、昭和九・一二／堀辰雄文学記念館蔵）
久松潜一『伊勢物語』（改造文庫第２部　第１５編）（改造社、昭和一二・一〇／堀辰雄文学記念館蔵）
屋代弘賢『伊勢物語参考』（岩波文庫、昭和一二・一二（初版 昭和三）／堀辰雄文学記念館蔵）
高崎正秀『伊勢物語新釈』（正文館書店、昭和一七／堀辰雄文学記念館蔵）

●『源氏物語』関連
中院通勝『岷江日楚』〈本居豊穎・木村正辞・井上頼圀　校訂　国文註釈全書〉
明治四三・九、國學院大学出版部／堀辰雄文学記念館蔵）
北村季吟『湖月抄』
（吉沢義則監修、宮田和一郎校合、平楽寺書店、昭和一一・四／堀辰雄文学記念館蔵）
萩原廣道『源氏物語評釈』
（本居豊穎・木村正辞・井上頼圀　校訂『国文注釈全書　源氏物語評釈　全』
國學院大學出版部、明治四二・一二／堀辰雄文学記念館蔵）

●『更級日記』関連
玉井幸助『更級日記錯簡考』（育英書院、大正一四・五／堀辰雄文学記念館蔵）
正宗敦夫編纂校訂『日本古典全集　第二回　土佐日記　蜻蛉日記　更級日記』（日本古典全集刊行会、昭和三・一／堀辰雄文学記念館蔵）
佐佐木信綱編『更級日記』訂正五版（中興館、昭和五・三（初版大正一五・九）／堀辰雄文学記念館蔵）
土井幸知、大森安仁子共訳　英訳『更科日記』三角社、昭和九・五／堀辰雄文学記念館蔵）
西下経一校訂『更級日記』教科書版２８（岩波文庫、昭和一一・一、第三刷（初版昭和八・四）／堀辰雄文学記念館蔵）
玉井幸助『更級日記新註』育英書院、昭和一一・二　改訂八版／堀辰雄文学記念館蔵）
西山茂二郎『姨捨山新考』（信濃郷土誌刊行会、昭和一一・一二／堀辰雄文学記念館蔵）
関根正直『校註更級日記』十版　明治書院、昭和一四・二　十版／堀辰雄文学記念館蔵）

●『今昔物語集』関連
源隆國著・藤岡作太郎校訂『今昔物語選　全』（袖珍名著文庫）（冨山房、明治四二・九〈五版〉／堀辰雄文学記念館蔵）
池邊義象編『今昔物語集』上・下〈校註国文叢書　１６・１７〉（博文館、第四版　大正一三・一一／堀辰雄文学記念館蔵）

正宗敦夫編纂校訂　『今昔物語集』上・中・下（日本古典全集刊行会、昭和七～八／堀辰雄文学記念館蔵）

●その他

森槐南（森泰二郎）『杜甫講義』上・中・下
（文会堂書店、明治四五・二～大正元・一一／堀辰雄文学記念館蔵）

森林太郎（森鷗外）訳『フアウスト　第二部』
（冨山房、大正二・四／堀辰雄文学記念館蔵）

ゲョエテ『若いヱルテルの悩み』（岩波書店、昭和三・一／堀辰雄文学記念館蔵）

『ジイド全集』全十二巻（建設社、昭和九～一二／堀辰雄文学記念館蔵）

大山定一『リルケ雑記』（創元社、昭和二二・一〇／堀辰雄文学記念館蔵）

淀野隆三・井上究一郎訳『失われた時を求めて　第一巻　スワンの恋　Ⅱ』
（新潮社、昭和二八・四／堀辰雄文学記念館蔵）

André Gide, *La Porte étroite*, Mercvre de France, 1907.（神奈川近代文学館蔵）

André Gide, *La symphonie pastorale* , Gallimard, 1925.（神奈川近代文学館蔵）

HANS BETHGE, *"PFIRSICH BLÜTEN AUS CHINA"NACHDICHTUNGEN CHINESISCHER LYRIK*, FRNST ROWOHLT VERLAG,, 1922 （神奈川近代文学館蔵）

Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu* , Gallimard, 1926 (French Edition)（神奈川近代文学館蔵）

Rainer Maria Rilke / traduction de Maurice Betz, *Les cahiers de Malte Laurids Brigge,* Librarie Stock, 1923.（神奈川近代文学館所蔵）

Rainer Maria Rilke, *LES FENÊTRES* ,LIBRAIRIE DE FRANCE, 1927.（神奈川近代文学館蔵）

Rainer Maria Rilke, traduites et commentées par J.F.Angelloz, *Les Élégies de Duino,* Paul Hartmann Éditeur, 1936.（神奈川近代文学館蔵）

Rainer Maria Rilke, traduites et préfacés par J.F.Angelloz, *DUINESER ELEGEN DIE SONETTE AN ORPHEUS, Les élégies de Duino et Les Sonnets à Orphée*, Aubier.Éditions Montaigne, 1943.（神奈川近代文学館蔵）

Rainer Maria Rilke, Introduction And Commentary by J.B.LEISHMAN & STEPHEN SPENDER, *Duino elegies: the German text with an English translation*, THE HOGARTH PRESS, 1952.（神奈川近代文学館蔵）

論文の内容の要旨

論文題目　　堀辰雄論――日本古典文学と西洋文学――

氏　　名　　大石　紗都子

堀辰雄（1904 ～ 1953）は、西洋文学の影響を深く受け、翻訳・詩・小説を著したほか、プルーストやリルケについても当時の先進的な理解を示した文学者の一人であったとされる。しかし堀は、『かげろふの日記』（昭和十二年十二月「改造」掲載）などを著した昭和十年代ころより、日本の古典文学を、随筆や創作において積極的にとりいれていく。このような古典文学への接近は、戦時体制を色濃くしていく時流への敏感な反応、もしくは、自らの資質によりそった芸術的な関心として論じられていた。従来的な評価に即すならば堀文学における古典文学受容は、微温的、自己保身的なものとも受け取れる。それがために、本質的な意味で戦時下の現実や古典文学の神髄に対峙していないといった、批判や留保も指摘されてきた。

しかしながら、堀辰雄の残した作品やノート、手沢本などをあらためて検証すると、堀が同時代における古典回帰の状況や、典拠となる古典文学と真正面から対峙しながら、創作を続けていた痕跡がうかがわれる。本論は、その洞察や戦略性がどのような点で評価されるものなのかを、明らかにする試みである。

文献学など国文学研究の方法論的見直しをめぐる同時代状況ともゆるやかな接点を持ちながら、堀辰雄は古典文学に取材し、作品化した。とりわけ堀の蔵書や創作などに見られる、当時の学問的な見地との接点や相関関係については、まだ解明の余地があり、国文学研究の歴史性・国際性を問い直す上でも重要かと思われる。

堀辰雄が戦時下において日本の古典文学を少なからず参照し、悲劇や孤独、不条理や、

死の観照さえ追究しながら、時局に追随する死の美化や表層的な復古主義に陥ることなく、倫理的・文学的な一貫性を保ち得たゆえんは何なのか。堀の創作活動にみられる西洋文学と日本古典文学からの取材の軌跡は、単なる作者の資質や時局的な要請としてではなく、戦時下の日本文学の果たし得た可能性の一つと見なすことができるだろう。そのことは、しばしば、現実から遊離したもの、国家主義イデオロギーに絡め取られかねないものと論じられてきた観のある「日本浪曼派」などがなぜ時代を席巻したのかを、問い直すことにも通じていくのではないか。

以下に、本論における各章の内容を記す。

第一部　堀文学における西洋的知性―〈芸術家小説〉の追求―

第一章「『風立ちぬ』を生んだ文体と方法論」では、堀辰雄の代表作『風立ちぬ』が、生前の恋人節子との日々という二度と回帰できない時間を、その時の特殊で繊細な幸福感によりそいつつ、一方では「私」のエゴイズムを断罪し対象化するような、重層的な語りの視点をもって描いていることを指摘した。「私」に追い打ちをかける生と死の懸隔という酷薄さと、節子の死を乗り越える「私」の救済という、相対するテーマを両立させるにあたり、リルケの影響が深く介在していることを明らかにした。

第二章「『美しい村』におけるゲーテとプルースト―〈芸術家小説〉の観点から」は、『風立ちぬ』に先立って執筆され、同じく軽井沢とおぼしき舞台や、小説を書く「私」が登場する『美しい村』を考察した。従来の研究では本作はプルーストの影響、ないしそれからの逸脱が現れたものとされてきたが、「芸術を創造する」ということそれ自体を題材化してみせる小説であることに着目し、本作がプルースト『失われた時を求めて』とゲーテ『若きウェルテルの悩み』を濃密につなぐ主題性をもっている点を指摘した。関連して、楽曲形式のフーガ（遁走曲）に学んだ作品構成や、その他の典拠、絵や音楽といった芸術的ジャンルとのつながりがみられることを明らかにした。

第三章「『美しい村』から『風立ちぬ』へ―合わせ鏡としての両作品」では、『美しい村』と『風立ちぬ』は、堀自身が自序にも指摘したように相似性がみられることに着目した。両者には共通する典拠や特徴があると同時に、対照的なテーマや異なる語りの方法も指摘できる。両作品の比較から、不条理や悲しみの描出が堀作品において深化していく筋道を考察した。

第二部　堀辰雄の文学―日本古典文学と西洋文学の結節点

第一章「『曠野』における達成―“古典回帰”との関連と「不条理」の追求― 」では、昭和十六年十二月「改造」掲載の『曠野』において、日本の古典文学および西洋文学から着想が得られた痕跡を明らかにし、堀作品における新たな解釈の可能性を展開した。また、堀の蔵書調査から、従来典拠として自明視されてきた「今昔物語集」の他に「伊勢物語」の略本、アンドレ・ジイド『狭き門』などの典拠を指摘した。

第二章「『姨捨』にみる東西文学の融合―「永遠の女性」について 」では、「更級日記」を典拠とした、昭和十五年七月「文藝春秋」掲載の『姨捨』を論じた。本作は、少女のころにいだいた夢が破られていく女の生涯を描きながら、非現実的な憧憬の肯定ともとれる結末で閉じられており、解釈についてはさまざまな見解が示されてきた。夢に破れた女性のかがやきという、一見両義的で難解なテーマは、従来リルケの作品に描かれた女性像に由来するものとされてきた。しかしそれのみに留まらず、「更級日記」における「源氏物語」の影響や、漢詩文の発想などにも通じる要素があることを、堀の手沢本や原稿から明らかにした。また、本作の女性表象が、戦時下を支える「良妻賢母」を推奨するような、当時の女性表象とは似て非なる点があることを考察した。

第三章「『姨捨』『姨捨記』と更級日記―保田與重郎との関連― 」では、古典回帰といわれる昭和十年代の、小説・評論・学界における「更級日記」受容を分析した。戦時下の古典回帰の一端を牽引したとも指摘される「日本浪曼派」の代表格、保田與重郎の「更級日記」論に、堀が影響を受けたことは、これまで、堀の西洋文学受容と矛盾するものとされてきた。しかしそうではなく、堀が保田與重郎の見解の良質な側面に共感したとみられ、その点において西洋文学の本質とも矛盾しないことを指摘した。またそれは、当時の国文学研究の主流が、日記文学を、史実的要素や作者の告白、写実性に重きを置いて理解していたことに照らし合わせると、日記文学の虚構的な秩序をいち早く指摘している点で、堀と保田の共通点が注目すべきものであることを指摘した。

第三部　「昭和十年代」と“古典回帰”試論　―国文学研究と「日本浪曼派」

第一章「堀辰雄と古典文学―実存と“他者”による救いの観照」では、堀文学の初期と古典文学受容以降のつながりを考察した。堀がかねてより、心理変化の不可知性や、他者との懸隔など、矛盾に富んだ人間存在の側面に関心を寄せていたことは、指摘されてきた。そのような不合理な人間存在への洞察が、堀文学における古典文学受容の必然性ともみられ、さらにはそのことが、古典文学を通じていかに深化していったのかを指摘した。

第二章「堀辰雄『魂を鎮める歌』――「万葉集」と「伊勢物語」の連関」では、 堀辰雄が「万葉集」と「伊勢物語」に言及した『魂を鎮める歌』を論じた。それは、きわめて独特な原典理解とみられるが、同時代に対する批評性のほか、折口信夫との影響関係、リルケの受容が指摘でき、それらがいかにして通底しているのかを考察した。

第三章「反語的精神の萌芽―「日本浪曼派」始発期の可能性と亀井勝一郎『生けるユダ（シエストフ論）』」では、戦時下の古典受容において独特な位置を占めた「日本浪曼派」の、始発期にあった良質なエネルギーと、それが変容していく限界とを明らかにした。その一人、亀井勝一郎の文学的出発点では、政治的な理想を破られた者が「転向」し、文筆に自身の存在意義をかけていくことの苦渋と弁明が、晦渋な文体でもって生み出されている。それは、とりわけ戦時体制の色濃い昭和十年前後において、政治や時局的制約との厳しい相克に対峙した言説の問題を解き明かすことにもつながっていく。